7 月 25 日のメッセージ

聖書：コリントの信徒への手紙二　5: 14 – 6: 2

「和解の言葉」

「大事の前の小事」とばかりに犠牲を強いることがあります。犠牲となるのは常に弱者です。犠牲者の思いとは関係なく、集団の利益が優先されます。そして、そこで排除される者たちに目が向けられることは少ないでしょう。特に経済を優先しようとする時、その圧力は非常に大きなものとなります。私たちの社会でも、高度経済成長期以降、バブル期も、そして今の新自由主義経済期も、ずっとこの構図が維持されてきました。

犠牲が「教会のため」「神のため」と理由付けされた時には、教会であってもこの「集団の利益」とは無縁ではありません。教会の歴史を振り返っても、犠牲となった方々がおられたのもまた事実です。

神は果たして犠牲を望んでおられるのでしょうか。いいえ、決して新たな犠牲を求めてはおられないでしょう。なぜなら神は、独り子イエスを世に送ることによって、ご自分と世を和解させられたからです。和解のプロセス(過程)を人間と共に歩もうと決意されたからです(「つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」コリントの信徒への手紙二 5:19)。

だから神はイエスを十字架につけられ、復活させられたのです。それは、「もうこれ以上、犠牲は不要だ」ということを私たちに伝えるためでした。ですから、神との関係には新たな犠牲を必要としません。むしろ、神が求めているのは憐れみです。隣人の痛みを自分のものとする愛なのです(「『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」マタイによる福音書 9:13、「わたしが喜ぶのは／愛であっていけにえではなく／神を知ることであって／焼き尽くす献げ物ではない。」ホセア書 6:6)。

もちろん、糾すべきところは糾さなければなりません。我慢を強いられている人がいるならば、少しでも良い方向へと導いていくことが求められています。そして、誰かが我慢して神の義が実現されるのではなく、全ての者が神に感謝することによって神の義は実現します(「『恵み深い主に感謝せよ／慈しみはとこしえに』と主に贖われた人々は唱えよ。」(詩編 107:1-2)。

私たちに託されているのは、愛を告げ知らせることだけです。誰かを犠牲にしながら右肩上がりの成長を目指すのではなく、和解のプロセスを共に歩むことが求められています。私たちが語るべき言葉はすでに与えられています。それは怒りの言葉、呪いの言葉ではなく、恵みの言葉、祝福の言葉です。分断を生む言葉ではなく、和解を目指す言葉です(「和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」コリントの信徒への手紙二 5:19)。

神との和解、隣人との和解、全ての人との和解を目指して、今日も私たちは愛を、憐れみを宣べ伝えるのです。